

百発百中の一砲は百発一中の敵砲百門に対抗しうる。これは日本海海戦後の連合艦隊解散の辞にある有名な言葉である。同海戦での日本の勝因については多くの説があるが、相手方の船を殆ど沈めたのだから日本側の弾の命中率が高かったことは間違いない。ただこの思想は後の日本の軍隊に、合理性を軽視し、精神論を重要視する風土を生んだとされる。戦争はいかに相手を倒し、破壊するかを追求する。昔は百発百中の砲など実際にはなかったから結果としていかに効率のよい“弾幕”を張るかの統計学的な射撃論が重要であった。戦場の様に不確実性に満ちた場所では百発一中の銃をどう使いこなすかが戦略になる。ベトナム戦争の統計では敵の兵士一人を倒すのに必要な自動少銃の弾丸数は2万発であった。第2次世界大戦では大型の爆撃機による絨毯爆撃が日本やドイツを焦土とした。

しかし今や様相はすっかり変わったように見える。その大きな要因は巡航ミサイル、スマート爆弾などの出現とその急速な発達にある。1000kmを飛んで命中精度2,3mと言う巡航ミサイルはまさに百発百中の砲（弾丸）である。もともと、一機数十億円のミサイルで相手国指導者の抹殺を狙う図式が、敵の大將の首を狙った元龜天正の戦国時代の戦法に重なるのも奇妙ではある。

一方、基本的な戦闘行為である歩兵同士の射ち合いでも百発百中を狙う戦法は存在する。優れた射手よる遠方（時として1km以上）からの狙撃は近代戦でも重要なファクターであり、ベトナム戦争では2名の狙撃手が一個大隊の敵300名以上に大打撃を与えた例が報告されている。また、戦場の兵士に最も恐怖感を与えるのは敵の狙撃手であるとの調査結果もある。歴史上には敵の狙撃で命を落とした重要人物も多い。イングランドのリチャード獅子心王は1199年に石弓で撃たれた。1805年のトラファルガ沖海戦ではイギリス艦隊のネルソン提督がフランス兵の狙撃に倒れた。ハイテク兵器による無機質な百発百中と異なり、戦場での狙撃は強靱な精神力により実行される。人間の意思の力が他人の命を奪うことに発揮される悲しい例ではある。敵が倒れたとしても誰が撃った弾に当たったのかが判らない乱戦での撃ちあいとは違い、狙撃手は自分の弾で相手が倒れたことを照準用スコープの中で確認する。冷静・沈着・機敏・機転・学習能力・感情の制御など狙撃手に要求される資質は多いが、最も重要なものは狙った標的に対する執着心のようなものである。

さて、物騒な話題を扱ってきたが技術開発の世界には百発百中の砲も巡航ミサイルもない。かといって絨毯爆撃のような戦法は今や経済的に通用しない。手を尽くしたマーケティングの成果からでもターゲットに何を選ぶか、撃つべき弾の数と照準に悩むことが多いのが現実である。首尾よく照準が決まれば実行あるのみだがこれは人と組織次第である。ことをなすのはマネージャーではなく、狙撃手にも例えられるべき技術者・研究者である。上記の資質要求は研究者・技術者にもそのまま当てはまる。では独創性はどうかと言う疑問があるかも知れない。狙撃手は目的達成のためにはあらゆる手段を尽くし、プロセスにこだわらない。これこそ技術開発に必要な独創性発揮のための条件である。

読み返してみても、強引に奇妙なアナロジーにこだわった気もするが、よく考えると技術者・研究者としてそうした姿勢を貫徹できなかったことへの反省が言わせるのかも知れない。